
レジェンド

一磨 洸平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レジェンド

【Nコード】
N0997BA

【作者名】
一磨 洸平

【あらすじ】
美しい峡谷を持つ国に住むトキナ姫は十七歳の誕生日に国を出ていった。
国の外はまだ戦国時代。

(Legend) トキナ姫

峡谷の朝は日の出前から始まる。

城の厨房ではカマドに火を入れ豆を挽き井戸水をくみ上げる作業に追われている。

森の中は小鳥が騒ぎ出し、家畜が餌を求めて鳴き始める、その声が谷の四方から聞こえる。

城は御山から流れる川を堀に流し、河原の真ん中の巨大な岩の上に作られている。

トキナ姫の日課は高い南の塔まで駆け上がり、垂れ下がった布を払いのけて塔の窓から急流の川に飛び込み対岸まで泳いで周辺を走り門番に隠れて城に戻る。

門番も濡れ鼠のトキナ姫を見て見ぬフリをする。

門番が注意をしても聞くような姫ではないからである。

濡れた身体のまま姫は厨房へ走り乳母で占い師のポルデエの朝食を運ぶ。

「トキナ様。昨日からの雨で川は濁っていたでしょう。大丈夫でございましたか？」

厨房の料理人はトキナ姫を心配する。なんといっても王妃が残したたった一人の子供。

にこりと笑ったトキナ姫が厨房を離れると城内を歩き回っていた左大臣のヨウリが料理人に神経質な声をかけ

る。

「姫はよらんだか？」

要らぬ世話だともうが父親の王がなかなか婚姻の日にちを決めぬので

娘のトキナ姫から積極的に話しを進めて欲しいヨウリである。

「先ほどボルディエ様のお食事を持って行かれました」と料理人。左大臣が動き回る時は姫に無理な願い事押し付けるときだと料理人は長い城の生活で解っている。

「まったく、今日という日にいつもの振る舞い・・・」

愚痴を言う左大臣を見送り、いつもより多い材料の仕込みに料理人は取り掛かる。

今日はトキナ姫の十七歳の誕生日。

王直々に料理の献立を言いつけられて忙しいのである。

器が二つだけ乗ったトレイと水差しを持って回廊を渡り北の塔の階段を駆け上がる。

隙間風が入らぬように石作りの部屋は分厚い布を張り巡らせている。

「ボルディエ、起きているか。今日は私が予言をしてやろう。そなたは昼までには王に呼び出しをされる支度をして待っているが良い」

トレイを片手に幾重にも張られた布を避けてテーブルの上に置くとボルディエはよそ行きのシヨールをかけて窓際に座っている。

「あれ、良い匂いですな。変わった匂いが混じっておる。何か私目の食事に入れましたな。ほほう、これは珍しいコッティの根を煎じましたね。それにファコム草・・・どなたか中原に行かれましたかな

私の記憶ではここ数十年、この国に旅人は立ち寄っていませんが」
白濁した目でテーブルを見る。濡れた髪の毛のトキナがうつすらと見える。

「オババは鼻が良い」

と窓際まで近寄りオババの様子を見て微笑む。いつでも呼び出されていいように支度が整っている。

「これは私の婚約者殿にお願いして届いたものだ」
椅子ごとオババを抱え上げテーブルにつかせる。

「ほう！では姿絵と共に届いたのですか」
トキナはオババとの会話が大好きである。

「そうだ、物語には男は女にねだられると喜んで苦労する書いてあった。その通りであったぞ」
オババの手元までスプーンを寄せる。

「それは、それは・・・」
明るい笑顔のオババである。物語の中の出来事を実際に行なう姫が微笑ましい。

開け放った窓を閉めて隙間に埋める毛布を拾い上げる。

「対岸の橋が壊れている。水量が増えたのが原因だな。御山の堰の工事を早めねばなるまい」
埃が立たないよう隙間を埋めるとおかゆを口に運ぶボルディエに横に立った。

「おやおや見てきたのかえ。私も食事がすめば大臣に会おうと思っていたところではあるが」

と窓に向けた顔が一瞬とまるいつの間にか足音を立てずにトキナ姫がそばにいる。

「いつから解っておったのだ？」とトキナ姫。

「さあてね。わしは気まぐれだで。ほう、懐かしい味だね」

はてさて姫はいつから気配を自在に操れるようになったのなとボルディエは思う。

しかし無駄な考えを打ち切る。

「そろそろ父王の元にいきなされ、ヨウリ殿がここに登ってくる。

私はヨウリ殿と話しよう」

ヨウリのせかせかせかした心が近づいてきている。

「オババの言うとおりにするよ。ではまた後で会おう」

ボルディエの忠告は素直に聞く。

「ああ、ああ」と返事をしながらどうやってヨウリ左大臣の心を落ち着かせようかと頭を巡らすボルディエ。

トキナ姫は塔の螺旋階段を無視して真ん中に開いた穴に飛び込みヨウリ大臣を交わして床に飛び降りると回廊の乾いた砂を蹴って大広間へと急いだ。

「父上」

又のそのようなところでトキナは姫は苦笑する。

昨日届いたトキナ姫の婚約者トビアス王子の絵の前で嫁ぐ日が近づいた姫を想い、ずっとこの広間でたたずんでいる。

娘の突然の登場に嬉しさが顔に出る。

「彼の身体の調子は、成長すると共に良くなっているようだな」

堂々とした体躯が王には眩しい。

「そのようですね」トビアス王子などには少しの興味も覚えないトキナ姫。

年を追うごとに居丈高になる立ち姿の男は血色の良い唇と見事な細工の剣を二本下げている。

恐らくトキナ姫が想像するに婿入りの際にはもつとしょぼくれた青白い男が現われると思っっている。

父親は絵姿通りの男が来てくれると喜んでいるのに水をさす言葉がトキナ姫に浮かぶ。

その言葉をかき消して、

「父上、誕生会よりも先に話し合わなければならぬことが出来ました。ボルディエが予言をしています。も壱がいつぱいで決壊の恐れがあると」

思い出したように大事なことを何気に切り出す。

「何？また彼女を御山に連れて行くのか？そんな辛い行動をとらせたくはないぞ」

過去に浸っていた緩い想いは退き王の顔が曇る。

「オババは御山では死なぬ。父上は心配のしすぎだ」

腕組をしてこ絵を何処に置くかを考える。母親の隣にはトキナは置きたくない。

かといってこれから町の長老たちがこの城に登ってくる。

いちいちこの王子を中心に会話を交わすのも時間がもったいない。

「父上この姿絵を私の部屋に持って行ってもよからうか」
裏返しにおけばよいのである。

「そうだの。そのために向こうは送ってきたのだから。それが良からうの」

一瞬父親として躊躇したがまだ本物お婿が来たわけではない沸き立った心を静める。

「では、しからばごめん」

等身大の立派な額縁つきの絵をトキナ姫は持ち上げると王の前から王子を隠した。

「ついでにラッパのリスに東の塔に昇るように言うておく。後でヨウリが来るが少し話を聞いてくれ」

と言い残して去ってしまった。

(Legend) トキナ姫の旅立ち

リス（兵士）が見張り台の上にのぼりラッパを吹き鳴らすと
甲高い音が変な拍子で峡谷の隅々まで響き渡る。

朝食を終えた町の代表者や年寄りらは朝の仕事を家族に任せて城への道を歩き始める。

リスのラッパが届かない尾根の裏側には

家長に命令された子供が犬の背にまたがり知らせに走る。

昼過ぎまでには話し合いに参加しなければならない。

峡谷のあちらこちらの町から三々五々と人々が塵除けのマントをひるがえし

城に渡る跳ね橋を目指している。

トキナ姫は御山の地図と国の地図とを大広間のテーブルに広げる。

「はてさて、一日で話し合いは終わるかのう」

駆り出された使用人が広間の入り口で

椅子とテーブルとが大広間にセッティングされていのに驚いている。

「私等の仕事は・・・」

大広間の真ん中にはトキナ姫が一人。

「うむ、上の部屋を寝所に使うかも知れぬ、用意を頼む。飯の支度もだ。あ、それからお肉は出すなよ。話し合いのときは塩抜きに限る」

旨い塩肉は食が進み眠くなるし塩分で水分を大量に取り廁へ立つ人

間が多く出る。

「へえ、承知しました。そのように料理人には伝えておきます」
昼までには重いテーブルや椅子を運ぶつもりでやってきた使用人は
手持ち無沙汰のまま帰っていった。

「これから二、三日は皆、頭に血がのぼるな」
広げた図面を指でなぞる。

壊れた土手のせいで川幅が広がっている。石橋は流れてきた雑木と
ごろ石。

供出させる資材の調達と作業をする人員の配置の変更はかなりもめ
るに間違いない。

御山の堤作りも関わってくると二日や三日では話し合いは終わらな
い。

しばらくトキナ姫は地図を見つめていたがつと顔を上げて窓から入
った陽射しに目を向ける。

窓の外では昨日の大雨でラウル川が白い波頭見せ荒れ狂っている。

「では、私も用意をするか」

朝日が山の上に顔を出して谷全体を照らし始めると見慣れた木々、
美しい果樹園が浮かび上がる。

気の早い人間はリスのラッパの音で家を飛び出したらしい。

小僧を一人従えてつづら折れの峠道を転がるように歩いている。

婚約者の絵姿を空き部屋に放り込み

片手でもてるだけの荷物を懷に縛り付けて足早に塔の階段を登る。

トキナ姫は今朝降りた方角の窓の垂れ布は開けず下流に向かう流れの中に飛び込んだ。

大した水しぶきも上げずに城の見張りにも気が付かれずにぐんぐんと速い流れに身を任せていると

地獄への入り口のように真っ黒な大穴がラウル川の全ての水量を飲み込んでいる。

ぶかぶか浮いてきたトキナ姫は近くの岩に手をかけてよじ登り大穴の壁伝いに暗い穴の奥底へと下りていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0997ba/>

レジェンド

2012年1月7日10時49分発行